

劇団☆新感線公演 仮名絵本西遊記 巻之一《烈風魔界天竺篇》

1991年8月28日～9月4日 東京サンシャイン劇場  
1991年9月11日～9月14日 大阪万国博ホール

キャスト	渡辺いつけい	牛頭夜叉	フランキー仲村
孫悟空	古田新太	美候王宮の謎の男	右近健一
幻装	猪八戒	謎の男の謎のアスタントガール	村木よしこ
猪八戒	竹田国吾	河野まこと	下村ともこ
沙悟浄	枯巻修	河野まこと	河野まこと
経蔵	高田聖子	猿黒サンボ	サコ
律蔵	陣内かおり	美候王宮女	出来とも子
論蔵	山本カナコ	仲野ゆづり	仲野ゆづり
頭陀二郎神	鳳ルミ	庄野ゆかり	庄野ゆかり
千年人參女王	羽野アキ	筒井みほ	筒井みほ
道楽道人	逆木圭一郎	神谷桂子	神谷桂子
美候王	栗根まこと	前田まき子	前田まき子
金角大王	猪上秀徳	悟空の分身	磯野慎香
銀角大王	猪上秀徳	石田アキヲ	石田アキヲ
鉄角將軍	橋本じゅん	乾筆	乾筆
鈍角將軍	橋本さとし		
馬頭夜叉	インディーズ高橋		

あとがき

新感線の東京進出から一年。第三弾の出し物をどうするか。  
『星の忍者』宇宙防衛軍ヒ『マロ』と、前二作は、ある意味自分たちの決め球を投げてきた。こけられないと思っただけで、それはそれで評判となり、東京でも定期的に公演を打っている目処みたいなのが立ちはじめた。この辺で、シリーズ物や改訂版ではない新作をやった方がいいだろう。そんな話をしているとき、いのうえひでのりが言った。  
「そろそろ西遊記をやろうよ」  
以前から「西遊記」をやりたいという話は、二人でしていた。  
最初は、東京進出前、まだ看板女優として白石恭子がいた頃だ。  
当然主役は女性になる。  
天界を騒がせた暴れ者の孫悟空、それが天軍に捕まり処刑されようとした時、三蔵という女性士官が裏切り悟空を救出する。  
彼女は悟空にこう頼む。  
「私を、幻装のもとに連れて行って欲しい……」  
幻装とは、三蔵の惚れた男で、己の野望のため天竺に伝わる教典——仏の力を手に入れようと西天奪經の旅に出ている。  
「あの男が、そんなものを手に入れたら、この世は終わる」  
命を救った礼としてボディガードの役を、無理矢理悟空に押しつけた三蔵の幻装を追う旅が始まる……  
と、まあ最初に考えていたのは、こんなプロットだった。  
白石が三蔵、悟空を猪上秀徳、幻装を古田新太というイメージだ。  
三蔵と幻装の二人を出すという展開が、まあ、自分としかやあ面白いかなと思ってた。ただ、お釈迦さまのところどころにありがたいお経をもらいに行く話という構造はどうも燃えなかったのだ。  
が、東京進出の時点で、すでに白石はいなかった。  
だったからどうするか。ちょうど、羽野アキ、高田聖子がのびてきて、村木よし子がオーディションで入ってきた時期だった。な

らばいつそのこと三蔵教典を女にしまえ。若い娘三人組が三蔵教典の化身だ。  
若い娘の奪い合い。新感線らしい「西遊記」じゃないか。  
渡辺いつけいが、状況劇場をやめて身体が空いていた。久しぶりの新感線、主役の悟空にはびつたりだ。  
古田の幻装という役は、奴に一度白塗りの悪役をやらせたかった。柳生一族の陰謀の成田三樹夫扮する鳥丸中將しかり、「必殺4」の真田広之演じる奥田右亮しかり。あの手のワルを試してみたかった。  
心が決まって、イメージはほとんど膨らんだ。  
いつけい悟空対古田幻装。身体が動く役者同士、立ち回りが思い切り出来るぞという思いもあった。  
結果的に、かなり面白い自分好みの作品に仕上がったと思う。  
東京公演の初日、終演と同時に響いたシアタートップス満員のお客さんの拍手。それが「おもしろい！」と言ってくれていた。  
客席の隅にいた僕は、その拍手に胸が熱くなった。自分達がやっていることは間違っていない。そう確信した。個人的な体験だが、あれほど終演後の拍手に胸が熱くなったのは、最初で最後だ。新感線という集団も自分も、そしてひとつとしたらお客さんも若かったのかもしれない。  
と、ここまで『仮名絵本西遊記』初演の思い出話。

この『巻之一』《烈風魔界天竺篇》は、それから3年後、初めてサンシャイン劇場という中劇場を使って公演した時のものだ。  
初演の時、ラストシーンに流した音楽があまった時に、いのうえの「せっかくくだから嘘の予告編をつけよせ」と言う思いにつき乗っかって作ってしまった予告編が、お客さんも自分たちも想像以上にひびびってしまい、結局予告編通りのパート2を作ったというのが、このサンシャイン公演だ。勝負に出た公演だったが、結構いろんなトラブルが起きて、ここで作った借金後は後々まで響くことになるのだ。  
もっとも内容的には、初演当時から役者も増えていたのでその分のキャストを増やしたりもしたが、大幅には変わっていない。ただし、(巻之二)にちゃんとながっているのは、この台本だけだ。「中島西遊記サーガ」的には、この台本が定本となる。ほんとね、この『仮名絵本西遊記』も第三部構想はあるのですよ。なんでもサーガにすりゃいいってもんじゃないけど、(巻之)ではまた。  
(二)を書いてほんとに書きたかったところまでは到達できなかった、イメージが零れてしまったという感はあるのだから。はっきりいって舞台じゃ絶対無理なので、台本にはしないけど。  
でも、サンシャイン版の大変な話とか第三部の話は、(巻之二)のあとがきに続く。なぜ続かないかと言われても、ここから続く。話の都合もあるし。話も読んでたから、あとがきも読んでほしいですよ。と、ちょっと傲慢な姿勢でごめんなさい。  
ではまた。